

〔現代語訳〕

尾張国小折村富士塚碑誌および銘

天地は生の、また先祖は一族の本、つまり根源である。孝心に富んだ子孫は、その根源を知らなければならぬ。尾張国土生駒利勝は、その祖先のために小折村富士塚に碑を建て、その功績を書きつけ、その慶び述べ、その名声を世にあわらそうとした。「そのため」とりあえず履歴を記し、余「林信篤」に撰文を求めてきた。余は、その根源を忘れない志に感じ入った。その家伝に言うには、昔、忠仁公藤原良房が山莊を和州（大和国）生駒郷に建て、その子孫がつぎつぎにそこに住んだ。それで生駒を氏とした。後裔は尾州に居を移し、小折村を領有した。左京進生駒家広は利勝より六代前の先祖である。文明年中「一四六九〇八七」、世間の評判がとても良かった。その次は加賀守豊政、その次は藏人家宗、その次は八右衛門尉家長と、相継いで国士であった。右大臣織田信長は家宗の娘を娶り、二男一女をもうけた。その長は秋田城介信忠、次は内大臣信雄である。娘は岡崎三郎信康に嫁いだ。これにより信長は家長をことに手厚くもてなした。天正十二「一五八四」年、信雄と相国「太政大臣」豊臣秀吉との間に争いがおこった。信雄は東照大神君（徳川家康）に志を通じて戦について相談した。神君（家康）は尾州に入り小折山に兵を駐屯させた。信雄と共に小折村に赴き、家長の屋敷に到着した。この時、家長は信雄の命令で勢州長島城を守っていた。嫡子利豊は幼く、庶兄右近善長が家に在って兩人をお迎えした。「これは」代々の荣誉である。神君は小折村から富士塚に登り、前線を視察して小折へ帰られた。その後、和議が成った。同十八年、信雄は左遷された。家長もまた年老いて隠居した。利豊は秀吉の命令にしたがい関白豊臣秀次に仕え、従五位に叙された。慶長五「一六〇〇」年、関ヶ原の役では利豊は福島左衛門大夫正則に属し、自ら首級を獲った。同年、神君が全国を統一し、高貴な血筋の従三位薩摩守源公（松平忠吉）が尾張国を領有した。利豊もまた命令によって彼に従うことになった。その後、従二位大納言源敬公（徳川義直）が尾州に封じられるにいたり、利豊はよく仕え、厚遇を受け、知行地は昔の通り、小折を与えられた。利勝はその子に当たる。ところで黄門「中納言」正三位中将（二代藩主光友）が家督を相続した後、特に利勝を選んで跡継の従三位中将（三代藩主綱誠）の守役とした。それは家系やそれまでにあった事実が、上述の通りであったからである。古からこういうではないか。遠い祖先のよい評判・荣誉は、子孫の地位や住まいである、と『顔氏家訓』『名実』。先ず利勝に祖先の余慶が無ければ、どうして今日の立場が得られたであろうか。今、祖先の祭祀を欠かさぬ孝がなければ、代々の重要な仕事も後世まで永く伝わらないであろう。まさに先祖の徳を慕い、志を受け継ぐ者である。ああ、あらゆる行いというものには、皆、本というものがあつた。本がはつきり示されることで枝が繁り、葉で覆われるのである。子孫の祝福を期待するのと同じことである。ことばは既にできた。併せてつなげて銘とする。

銘にいう。小折の村の あの高丘にのぼれば 「尾張」富士も遠くはない しばしば塚は奥ゆかしく 松林の木陰に接し 木曾「の山々」がよく見える 西には淡海（近江）を顧み東には参州（三河）を指す 爰に絶景を問えば かつて訪れたかのようにある 藤の懸つた岩ありて 李白は休憩し 野蛮な国が信服して 武侯（諸葛亮）を祀った「ように」 ましてこの境においてはなおさらである 神君が車を止め 風が旗をはためかし 日は武人

を照らす 栄は一時を輝かせ 誉れは千秋に伝わる

天和二年壬戌二月上旬 東武州学 整宇主人 林巖直民が誌す

(並河魯山撰文部分)

古人は碑を立てずと云う。「なぜなら」子孫に学才がなく、ただ他人のために鎮石を作るのみだから、と。これは功を謀ることではないのか。また、水中に沈めて予め陵谷の変遷のような大変化を推測する者がいる。これは利を謀ることではないのか。ああ、功利とは道義の当然の帰結ではない。そもそも時には満ち欠けがあり、物には盛衰がある。これは自然界の運命である。時機を見極めず、物事の当然の帰結を突詰めない。あるいは立てねばならぬのに立てることをせず、また沈めてはならぬのに沈めてしまう。かえって道義のありかが分からないのであろうか。董仲舒が云うには、誼(＝義)を正して利を謀らず、道を明かにして功を計らず、と。これから分かるのは、ああ、功利の害こそ知るべきである。

予(並河魯山)の知己、生駒利勝は父の失敗を取返した。ここ富士塚に碑を建て、人知れず「岷山にある晋代の羊祜の頌徳碑を見ると、彼を慕って皆感涙したと云う」岷山の遺風にとよせた。それとともに、林羅山先生の嫡孫で、弘文学院学士のご子息である優れた学者整宇(林信篤)に誌銘を丁重に頼んだ。遠い祖先の出自や経歴を彫らせ、後世へ家系を明らかにした。きっと永く金石とともに残るであろう。道義というものの当然の帰結として、立てなければならぬものは立て、沈めてはいけないものは沈めない。どうして功や利を謀る余地などあるだろう。ちょうど今、利勝の大事業があつてこそ富士塚の御歴々の行跡が全国に顕かになるのである。富士塚の御行跡のみあつて整宇の優れた才能が無ければ、利勝の大事業が後世に代々伝わることはなかったであろう。そもそも地は人に依つて興り、人は文に依つて興る。またここに尽きていよう。予は浅学非才の身で駿馬のような賢人(林信篤)と一緒にではない。しかし、「低い」楊園の道は「高い」畝丘につづく」と詩経にある「通り、あえて予も加わろう」。それで強いて利勝の要請を拒むことなく謹んで碑陰に書くことにした。

天和二年 壬戌三月中旬 尾陽の詞臣 釣耕軒 並河魯山が記す

(台石部分)

関山派に属する永泉寺の、いなか住職 特門が字を書いた。

天和四年甲子正月己卯日、尾張 長久寺 現住 卓玄が地鎮法を執り行った。

京都の石工 来宮石見守左衛門尉藤原広次流

尾張城下石工 井上長兵衛尉藤原広則が彫った。

天和四甲子年正月吉辰